

824(S-590)

一般演題

日産婦誌67巻2号

P3-2-5 当科における子宮頸部腺癌IB-IIIB期手術症例の臨床病理学的予後因子の検討

和歌山県立医大

馬淵泰士, 岩橋尚幸, 島佳奈子, 中田久実子, 野口智子, 吉村康平, 南條佐輝子, 山本 圓, 太田菜美, 八木重孝, 南佐和子, 井観一彦

【目的】子宮頸癌の中で腺癌の占める割合が増加傾向にあり、扁平上皮癌に比較して予後不良とされている。今回我々は、頸部腺癌治療の方向性を見出すことを目的に、同疾患の臨床的特徴を検討した。**【方法】**過去13年間に当科で広汎子宮全摘術あるいは準広汎子宮全摘術、骨盤リンパ節廓清術を実施した経験した浸潤子宮頸部腺癌IB-IIIB期35例について、後方視的に検討した。術前化学療法施行例は除外した。**【成績】**診断時の平均年齢は48.0歳であった。病期はIB期が28例、IIA期が4例、IIB期が3例、であった。組織型は、粘液性腺癌21例、類内膜腺癌11例、漿液性腺癌1例、分類不明2例であった。術式の内訳は広汎子宮全摘術32例、準広汎子宮全摘術3例であった。再発が11例に認められ、4例が原癌死した。リンパ節転移は7例に認められた。無増悪生存期間の中央値は37か月(4-140か月)、全生存期間の中央値は48か月(9-159か月)。5年生存率は91.8%だった。同時期の扁平上皮癌77例との比較ではOS、PFSとともに有意差は認められなかった。OSに関しては、単変量解析にて、脈管侵襲、骨盤リンパ節転移、および病期について有意差を認めたが、多変量解析ではいずれも有意差は認められなかった。PFSに関しては、単変量解析にて、腫瘍径、脈管侵襲、および病期がPFSに関して有意差を認め、多変量解析では病期がPFSに対する独立した予後因子と判明した。**【結論】**子宮頸部腺癌手術患者で、脈管侵襲陽性例に関しては、大きい腫瘍サイズや骨盤リンパ節転移と同様に、より慎重な対応の必要性が示唆された。

一般演題
12日(日)

P3-3-1 当科で経験した子宮頸部小細胞癌の臨床的検討

大阪市立大

川西 勝, 福田武史, 和田卓磨, 田坂玲子, 今井健至, 山内 真, 笠井真理, 橋口裕紀, 市村友季, 安井智代, 角 俊幸

【目的】子宮頸部小細胞癌は子宮頸癌の1-3%と稀な腫瘍であり、早期にリンパ節転移や遠隔転移を来し、予後不良である。当科で経験した子宮頸部小細胞癌を臨床的に検討した。**【方法】**1997年4月から2012年2月までに当科で経験した子宮頸部小細胞癌の11例を対象に患者背景、治療成績に関して後方視的に検討した。**【成績】**年齢の中央値は50歳(28-68歳)で、進行期はI期2例、II期3例、III期3例、IV期3例だった。初回治療は単純子宮全摘術が2例、準広汎子宮全摘術が1例、広汎子宮全摘術が4例、放射線治療が2例、同時化学放射線治療が1例、Best Supportive Careが1例だった。術後補助療法は同時化学放射線治療が2例、放射線治療が1例、化学療法が3例(パクリタキセル+カルボプラチニン1例、シスプラチニン+塩酸イリノテカン2例)で無病生存期間の中央値は12.1か月、全生存期間の中央値は25.3か月だった。5年以上生存している症例が2例あり、IIB期に対して広汎子宮全摘術の後、補助療法としてTC療法を施行した症例と、IIIB期に対して同時化学放射線治療を施行した症例だった。11例中6例が再発しており、再発までの平均期間は5.8か月で、再発後の平均生存期間は5.0か月だった。**【結論】**子宮頸部小細胞癌は予後不良で、半数以上は1年内に再発しており再発後は治療に反応せず短期間に死亡する症例が多い。しかし手術、化学療法、放射線治療の組み合わせにより長期生存を認める症例も存在し、集学的治療により予後の改善が期待できると考えられた。

P3-3-2 CTOS法による子宮頸部小細胞がん・腺がん混合腫瘍のクロナリティー解析

大阪大¹, 大阪府立成人病センター研究所生化学部門²

久保田哲¹, 清原裕美子¹, 森本晶子¹, 高田友美¹, 松崎慎哉¹, 小林栄仁¹, 上田 豊¹, 吉野 潔¹, 井上正宏², 木村 正¹

【目的】若年者に発症し予後不良な子宮頸部小細胞がんの中には腺がんなど他の組織型と共存するものがあり、発生過程との関連が推測される。我々は上記混合腫瘍が共通のorigin由来であるか、あるいは別々のoriginであるかを明らかにすることを目的として以下の研究を行った。**【方法】**腫瘍組織の上皮成分のみをスフェロイド培養するCTOS(cancer tissue-originated spheroid)は元の腫瘍の性質を保持しており、個人差を反映する生物学的なプラットフォームとして利用可能である。子宮頸部小細胞がんと類内膜腺がんが混在する1症例から調製したCTOSも混合腫瘍の性質を保持している。免疫染色にて、小細胞がん成分はCD99陽性、腺がん成分はCK7陽性である。今回、表面抗原であるCD99を用いて、FACSにより、CD99^{negative}、CD99^{low}、CD99^{hi}の細胞をsortし、各々を培養して表面抗原の変化を観察した。**【成績】**CD99^{hi}の細胞集団からはCD99^{hi}/CK7^{low}の細胞のみが出現した。一方で、CD99^{negative}、及びCD99^{low}の細胞集団からは、CD99^{hi}/CK7^{low}、CD99^{low}/CK7^{hi}の細胞が発現した。すなわち、CD99が低発現である細胞を培養することにより、CD99高発現の細胞が発現した。**【結論】**以上より、小細胞がんと類内膜腺がんが混在する本腫瘍は、共通のorigin由来である可能性がある。Pathogenesisを明らかにすることは予後不良な子宮頸部小細胞がんに対する有効な診断・治療法の開発に寄与すると考えられる。